

# 佑 啓

ゆ う け い

発 行 者  
社会福祉法人 佑啓会  
理事長 里見 吉英  
〒290-0265  
千葉県市原市今富 1110-1  
TEL 0436-36-7611  
FAX 0436-36-7612  
編集者 広報委員会

## 我以外皆師也

### 請井 征力

このたび「市原市福祉会館々長」  
「ふる里学舎五井福祉作業所々長」  
を拝命いたしました「請井」でございます。

まずは自己紹介として我が故郷  
を紹介いたします。現在は町村合併で  
「新城市(しんしろし)」となっております。  
以前は「愛知県南設楽郡鳳来  
町(みなみしたらぐんほうらいちやう)」  
でした。この町が歴史上有名な  
「鳳来寺山」と「長篠(ながしの)  
の合戦」があったところです。「鳳  
来寺」とは、徳川三代將軍家光の時  
世で大いに栄えたのです。それは徳  
川家康の生母・於大の方が参籠し、  
家康を授けられ家光がここに鳳来  
寺を再建立します(一六五一年)。こ  
こで家康を祀り、東照宮寺(日光、  
久能山と並び)として栄えたところ  
です。

「長篠の合戦」は一五七五年織田  
信長、徳川家康連合軍と武田勝頼  
(信玄の嫡男)と設楽ケ原(したらが  
はら)を中心に繰り広げられた壮大  
な戦いです。ここでは織田連合軍が  
勝利し、日本の戦国地図が大きく変  
動したといわれる場所です。この戦  
いのキーワードは「双方合わせて約  
五万三千人での戦い」、「三千丁の  
鉄砲(種子島)」を初めて使用した戦  
い(三段構え)、「武田の強大な騎馬  
隊を防いだ馬防柵(ばぼうさく)」、「  
兵糧攻めにあい落城す前の城を

(かいこう)(出会ひ)の連続であり、  
人生の多くを邂逅が決定する」とい  
う道元禪師の教えのとおり、まさに  
すばらしい人達との「出会ひの連  
続」でした。特にその当時も全国的  
に有名であった「前佑啓会理事長古  
川弘先生」、現在もいろいろな大学  
の教授をされている「渡邊映子先  
生」が上司という形で恵まれ、すば  
らしいご指導を受けたことです。先  
生方との出会ひがなければ現在の  
私は存在しなかったのではないかと  
思っています。



さて、私自身も事業団での生活が  
十数年過ぎた頃、またすばらしい出  
会ひがありました。なぜか不思議な  
光を帯びた新人職員が入団してく  
たのです。その新人職員とはなぜか  
気が合い(私だけかもしれないが?)、休日  
を返上して「新しい研  
修」があれば誘い合つて東京等に出  
かけたものでした。その新人が現在  
の「里見理事長」だったのです。そ  
の後、彼は事業団で活躍をされま  
した。二十年前に自分自身で新し  
い理想の施設を設立されるという  
ことで三股、長良、飯田、在原、  
松橋さんというすばらしいスタッ  
フを率いて、難産の末、今の「佑啓  
会ふる里学舎」を誕生させたのです。  
その後山口、松田、行場さんも職員  
として参入し、今では毎年のように  
各方面からの要望もあり、多くの事  
業を拡大し、すごいというより「驚

愕」といわれるぐらいの事業展開を  
しています。私も役員として誇りに  
思っております。私自身としても  
三十六年間、知的障害児者と共に生  
活してきましたが、その生活の中で  
強く印象に残っているのは強度行  
動障害児者という大変難しい方々  
の出会ひでした。その強度行動障害  
児者や家族の苦しい状態を数多く  
みてきて、いつも彼らが成長してい  
く中でなぜこのような苦しい状態  
に至るまでに「誰か」「どこかで」  
「強力で良好な介入」ができなかつ  
たのか、残念に思っていました。そ  
こで彼らに対する早期発見・早期介  
入・早期療育の重要性を知りました。  
またそのことが彼らの今後の支援  
に重要な位置を占めていることも  
知りました。その後、事業団を退職  
し、里見理事長の紹介もあり、二〇  
〇五年からまさに早期療育の最前  
線である市原市発達支援センター  
の相談業務に就くことになりました。  
そこで五年九月間、多くの子  
ども達や親御さんとお会いし、私自身  
の心に刻まれたことは、「障害受  
容」の過程で、「苦悩・葛藤」を目  
のあたりにしたことでした。それは  
「つらさ、驚き」「混乱極まる心」  
であり、そしてそれを「否定したい」  
「拒否したい」、でも現実を受け止  
めざるを得ないという「揺れる心」  
でした。そして「障害受容」し、そ  
の一步を踏み出そうとする勇氣も  
見ることができました。それらを見  
るにつけて「療育相談」という仕事  
は、「辛さ・悲しさ・葛藤」から始  
まり、生活の後ろに横たわる様々な  
ものを少しでも理解することとし  
た。親御さんを変えなければいけな  
い、指導しなければいけないとい  
うことでなく、苦しい気持ちを少し  
も受け止めて、相談を受けなければ  
いけないのだという思いを強く持  
ちました。そうすることで、ある種  
の「信頼や尊敬」に近い感情がお互  
いに湧いて、相対することが出来る

ようになりました。また障害児の子  
育てが、不器用であればあるほど、  
周囲の評価の厳しさがあり、それら  
に直面した親御さんは「苦悩・葛藤」  
されていました。相談員としてはど  
んな小さなことにも「傾聴する」こ  
とで、「心の居場所」を作ることだ  
と思えました。そこで相談センター  
や私自身が親御さんや子ども達の  
「心の居場所」にならなくてはと常  
に思いながらこの仕事をしていま  
した。このような療育相談に携わっ  
てみて、私自身、身体が続けられる  
まで療育相談の仕事が続けようと  
思っていた矢先、里見理事長より  
「市原市福祉会館、五井福祉作業  
所」の責任者を要請されました。す  
ばらしいスタッフに恵まれ、福祉会  
館・作業所等、慣れない仕事ですが、  
無我夢中で仕事をしているのが現  
況です。



最後に私をこれまで導いてくれ  
た「座右の銘」というか教訓を「四  
つ」書かせていただき閉めさせてい  
たきます。教訓の一つ目は前述し  
た「邂逅の重要性」であり、「人と  
の巡りあい」を大切にしたいという  
ことです。

二つ目は「我以外皆師也(われい  
がいみなしなり)」です。私以外は  
皆先生で、この世界のあらゆる物が  
我々に何かを教えてくれるすばら  
しい先生達です。我々はあらゆる他  
者性や自然の作用を感じながら生  
きているということです。

三つ目は「怒(じよ)の精神」です。  
それは中国の諺で「子貢(しこう)  
問うて曰く、一言にして以て終身こ

れを行うべきものありや」「孔子  
曰く、それ恕か。己の欲せざる  
ところ、人に施すなかれ」「先生、  
一言でいって、生涯私として何を  
一番心がけたらいいでしょう  
か。」「それは『怒』だ。」「怒とは  
優しさと思ひやりの心だ。」「また  
他の人を自分と同じように大切に  
することで、自分がして欲しく  
ないことを他人にしないこと  
だ。」

四つ目は詩人「金子みすゞ」の  
詩です。「お花が散って、実が熟  
れて、その実が落ちて、葉が落ち  
て、それから芽が出て、花が咲く、  
そうして何遍まわったら、この木  
は『ご用』がすむかしら」この詩  
は「生きていくことの意味とは何  
か」ということを我々に問いかけ  
ているような気がします。この詩  
の「木」のように「花」のように

「葉」のように、その存在は過去  
から未来へ、その生命の営みを紡  
いでいくものだと思ひます。この  
思ひを心底味うことが出来た  
時、人は初めて、自分自身の『ご  
用』が何であるのか。たった一つ  
の生命にも意味があることが理  
解出来るのではないのでしょうか。

これには我々福祉の仕事に携わ  
るものとして『ご用』が何である  
のかをあらためて問いたいただ  
せているような気がします。私自身  
もこの四つの教訓を常に心に刻  
み、大切にして過ごしていきたい  
と考えております。今後とも皆様  
方のご指導・鞭撻のほどよろしく  
お願いいたします。  
(五井福祉作業所 所長)



一年お世話になって

浦邊 律

2011年(平成23年) 5月26日(木)

息子の邦充が、ふる里学舎和田浦に入所して満一年が経ちました。最初の頃は、定期帰省した後で学舎に帰る時に、少し嫌がる様子がありました。数ヶ月経ってからはそんなことも無くなりました。何より、入所前に100kgを超えていた体重が、食事管理と作業のお陰で、グングン減って、今は70kg台になりました。(身長一七六cmです)指導員の先生方や同僚の皆さんに良くして頂き、心身ともに健やかで楽しい日々を過ごさせて頂いています。本当にありがとうございます。邦充は、私どもの三番目の子どもで、次男として生まれました。長女・長男(姉・兄)は、健常です。

邦充は可愛らしい顔立ちで、家族・親類中でも人気の子でもでしたが、三歳半の健診で発達障害が疑われ、そして自閉症と診断されました。その時、はじめは、言葉の発達が遅いのと声かけへの反応が悪いので、聴力に問題があるのかとされて、耳鼻科の医師の診断を受けたのでした。

その医師が診察の後に「これは耳じゃないよ。(頭を指さして)コッチだよ。」と言ったそうです。同行した妻は、その時の医師の態度がショックで、今も忘れられない、と言っています。

その後、就学前は君津愛児園にお世話になり、小学校は普通校の特別学級に入学しました。三年生から君津養護学校(のち君津特別支援学校に再編)にお世話になり、その後、中・高と通学して来ました。夏休み・春休みには、ふる里

機関紙 佐 啓

学舎市原と和田浦の交流合宿などを利用して頂いていました。邦充は、もちろん自閉症特有の症状がありましたが、一番困ったのは、人が大勢集まっている場所がどうしても苦手なことです。入学式・運動会・卒業式など思い出となるような機会はほとんど、苦痛な表情で耳を塞ぎ、固まっていたり、その場から出ようとして動き回っていました。これは、今もあまり変わりません。

もう一つ、困ったのは肥満です。小学校入学くらいの年齢までは、小さくて可愛い姿を保っていました。が、小学部五年生くらいから猛烈に食べるようになり、凄まじい勢いで太って行きました。一緒に身長も高くなり、以前の可愛らしさは見る影もない「100kg超」の大男になってしまいました。私ども両親も、邦充が食べ物を欲しがってパニックを起すこと、ついつい与えていたのはいけませんでしたが・・・。



この間、君津特別支援学校時代のお友達などの話を聞いたり、またふる里学舎の学習会で学ぶ中、知的障害者(児)の置かれている状況の厳しさを、更に強く感じています。邦充が、ふる里学舎和田浦に入所できたことは、本当に有難いことであつたと、痛感しています。学習会などで何だったことですが、知的障害者(児)の多くの、自分たちの置かれている状況を説明したり、それを周りに訴えたりする力がありません。私たち親が、その代弁者となっていくことが重要だと強く思っています。知的障害者(児)は、増えているとも聞きました。私たち親や家族が、益々横のつながりを強めて、行政や社

私たちにできること

堀金 兼太郎

三月十一日 東京都文京区  
鳴ることも、かけることも出来ない電話機の前で、焦りは募っていく。間もなく午後四時。平時であればもう直ぐ利用者は三々五々、帰路に着く時間である。しかし、今は帰すことは出来ない。ご家族と連絡が取れない。皆が足として使っている電車・バスは全て電話同様麻痺してしまつた。何人かの親御さんは既に作業所へ迎えに来てくれ、あつちの地域は渋滞が酷かつた。バス停も公衆電話も長蛇の列だつたと色々な情報を教えてくれる。僅かな時間ではあつたが、外部との連絡が取れない状況に、孤立感が増していた所だったので、情報はあるとより、人との接点を得られたことでようやく落ち着くことが出来た。



しかし、定時になつても帰宅が許されないことに、「何故?」を求めてくる利用者も少なくない。それが彼らの特性であることは解っているが、しかしいつ帰れる、どうやって帰れるという答えを示すことも出来ず、「大丈夫」という根拠も無い、求められてもいない答えをするしか出来ない。何とか連絡が取れた方、連絡は無くともお迎えに来てくださった方などで大半の方は遅れながらも、帰宅の途につくことが出来たが、午後七時を過ぎても未だ帰ることの出来ない方々と待機。通所施設のため、夕食の準備はない。こんな時のための非常食・・・とも考え

たが、火を使うことへの躊躇いもあり、後輩に向かいのコンビニへ買出しに行つて貰う。が、なかなか帰つてこない。しばらくして両手に沢山の弁当を抱えて帰ってきた。どの店でも既に品薄状態で、何件か梯子して買い集めてきた。夕食を食べて元氣も出たところで、単身生活の方を自宅まで送ったり、家まで様子を見に行くなど、役所の方の協力もあり、動くことが出来た。また、送迎車両をお持ちの他法人施設の協力も得られて、ご家族と連絡が取れた方を自宅まで送ることが出来たのは午後九時。普段であれば数十分で回れる距離を渋滞の影響で五時間掛かり、運転をしてくださった方や付き添いの補助をしてくださった方には今でも感謝の念は絶えない。

しかし、ご家族と帰宅したが、停留所の混雑に待つことが出来ず、作業所に戻つてこられ、一晩宿泊することになった方もいた。施設の前の国道には所謂「帰宅難民」が途切れることの無い列を成している。夜の街に深夜まで鳴り響く靴音は不気味であつた。車道はどこまでも赤いテールランプが続いている。紛れも無く非常事態なのだ。と改めて感じた。

女性職員は夜間になり地下鉄も動き始めたので、何とか帰ることが出来た。残る男性職員は皆宿泊。利用者を送ってきた職員が戻つてきて、情報の整理、明日以降の動きの確認などを終え、寝たのが午前三時。作業所に置いてあるマイ寝袋に潜り込む。しかし、神経も高ぶり、緊張もあるのか寝付けな

い。ようやく眠つたかと思つた利那、緊急地震速報が鳴り響く。寝袋は失敗だった。正に手も足も出ない。何とか脱出したが、実際揺れることは無かつた。あつという間に夜も明け、利用者、ご家族、職員で朝食を食べ(これも深夜のコンビニで何とか購入、帰る目途がついた。どうかこうにか私を含め職員が自宅に帰れたのは十二日の午後であった。たどり着いた自宅の街の空気は焦げ臭く、地震により近隣のコンビニナートが爆発し、なおも炎上していた。我が家族は知人宅に避難していたらしい。娘たちからは下校途中に大きく揺れて怖かつた、空がオレンジ色に光つたら爆発音と共に熱風がきて怖かつたとその時の様子を知らされた。

週末を挟んで月曜日。新たな問題が発生。計画停電により通勤の足がない。当日の早朝に発覚し、午前四時から職員と連絡を取り合つて車に乗り合わせ出勤。翌日も同様であった。毎日こんなことが続いてはたまらんと正直思つたが、被災地のことを思えば・・・という気持ちと、毎日通うのを楽しみにしている利用者のため・・・というのも勿論だが、受注作業に遅れが出してしまったといけないと(発注元は地震の直後にも普通に動いていた)、何とか持ちこたえた。その後、電車は動くようになって、停電の影響でダイヤは日替わり、当日の朝駅に行かなければ、電車の時間は判らないという不安定な状態が続く、今までの規則正しい運行時間Ⅱ自らの生活スタイルが崩壊し、不安とストレスは募つていた。利用者があの日、突如としていつものパターンを奪われ、不安を感じたのと同じ状態である。根拠は無いが「大丈夫」と自分に言い聞かせるしかない。

彼の地では命、家族、家、地域、多くのものが奪われ、今もなお元の生活に戻れず、また先が見えない生活を送られている方が沢山おられる。私たちが少しでも今回の地震を体感したこと、思いを馳せ、出来ることを最大限行うこと、現状の生活スタイルにアジャストしていくことが必要であろう電力、電車、電話、私たちが依存していたそれら文明は自然の猛威の前には斯くも脆弱であつたかと思つと同時に、文明に頼る生活が如何に不安定なものであつたかを突きつけられた。

神ゼウスは人間を作り知恵を与えながらも「火」を与えることは許さなかつた。しかし、プロメテウスは人間に火を与えてしまふ。人間はそれにより奢り高ぶる。神は人間への報いとしてパンドラという女性に開けてはいけない箱と好奇心を与えた。ついにその箱は開かれてしまひ、あらゆる悪が世界へ出てしまつた。しかし最後に弱々しくも箱から出てきたもの、それは「希望」であつた。

文明への懐疑と同時に再発見したもの、それは世界に賞賛される日本人の連帯感、思いやり、東北人の負けじ魂という文化である。この文化を希望として、これから長く続く復興の力としたい。電氣は無くとも元氣があれば何とかできる。

(大塚福祉作業所支援主任)

編集後記  
今まで「普通」に生活出来ていた事が、幸せな事だと気付かされました。普通って何だろう。様々な思いが交錯した約二ヶ月。初夏の風薫る和田浦から佐啓七十六号をお届けします。

高橋 未和